

# はじめに

学校長 小森 伸一

2020（令和2）年度より、本校では「『こえる学びの拡張』を視野に入れた学習環境デザイン」という研究主題において校内研究を推進してきました。これは、それ以前に取り組まれてきたテーマ「『こえる学び』を生む学習環境デザインの追究」（2017年～2019年）を発展させた内容でもあります。

当研究テーマのキーワードとなる「こえる学び」および「こえる学びの拡張」とは何でしょうか。簡潔に述べれば、「こえる学び」とは、子供自らが主体的に学びに取り組む探究して自分の知識・技能を育んでいくとともに、得られた学びや気づきを自身で振り返ることで、自らの思考や行動をより広げ深めていくという学びの姿勢です。能動的かつ発展的で、柔軟な学習形態といえるでしょう。

また、「こえる学びの拡張」とは、ある授業（または単元）で学習を終えた子供が、その後も自発的に学び続け、その学びを活用したり実践したりすることです。そのような学習が発揮される場面は、他教科も含めた今後の授業、学校生活・行事、家庭生活、自分が関わる社会等というように幅広く捉えられます。そうすることで、自分自身や自分が生きる社会を充実させていくのです。

OECD（経済協力開発機構）は、未来の教育を標榜して“Education2030プロジェクト”を国際的に推し進めています。その中核的概念の一つに“Agency”（エージェンシー）があります。Agencyは、概して、よりよい自分と社会＝well-being（ウェル・ビーイング）の創造に向けた変革をもたらすことのできる総合的な力をいいます。上述の「こえる学び」および「こえる学びの拡張」を主眼においた教育は、そのAgencyの醸成に通じるものともいえるでしょう。

本書は、各教科部の授業実践において見て取れる「こえる学び」、さらに「こえる学びの拡張」につなげるための教員の工夫や手立てについて、「学習環境デザイン」の見解も交えつつ紹介しています。子供たちが主体的に探究し自らの人生を開いていくことにつながる授業づくりへの一助になれば幸いです。

はじめに.....1

## 第1章 「こえる学び」を目指して

予測困難な時代を生きぬく 子供たちへ .....6  
「こえる学びの拡張」を視野に入れた学習環境デザイン.....8

## 第2章 実践編

### 国語科第1学年

ことばの感度を高め、批判的思考を身に付けていく授業 .....18

### 国語科第3学年

筆者の「編集者」になって、文章を読んでいく学習 .....24

### 国語科第4学年

筆者の論理を探究的に読む説明的文章の授業 .....30

### 社会科第4学年

子供の真の考えを引き出す社会科学習 .....36

### 社会科第5学年

実感と社会的な意味とを往還する授業 .....42

### 算数科第1学年

異なる場面から、共通点を見つけ同じもの考える授業 .....48

### 算数科第3学年

「○○を1とみる」見方に抽象化して統合する学習 .....54

### 算数科第3学年

解決した問題を発展させ、新しいことを発見する学習 .....60

### 理科第4学年

印象や先入観に惑わされず、事実から妥当な考えを導く学習 .....66

### 理科第6学年

岩石を色々な方法で調べ、自分なりに判定する学習 .....72

### 生活科第1・2学年

とことん遊ぶ中で追究することの面白さを実感する学習 .....78

### 音楽科第3学年

音楽の特徴を捉え、様々な方法で表現する学習 .....84

<b>図画工作科第2学年</b>	
鑑賞の能力を働かせてお話をつくる学習	90
<b>家庭科第6学年</b>	
「快適な住まい」を通して価値観を拓げていく学習	96
<b>体育科第2学年</b>	
運動の面白さを追究する学習	102
<b>体育科第2学年</b>	
短縄・長縄遊びの面白さを追究する学習	108
<b>体育科第2学年</b>	
体育における「運動遊び」を「日常遊び」へと導く学習	114
<b>特別の教科 道徳第5学年</b>	
子供が生命の尊さを身に付けていく学習	120
<b>外国語科第5学年</b>	
SDGsを視野に入れた教科横断的な中の英語の学び	126
<b>食育(生活科)第2学年</b>	
自分自身を見つめ、食べることへの意識を更新していく学習	132
<b>ICT(特別活動)第5学年</b>	
係活動間でのコラボレーション企画を発想する学習	138
<b>ICT(保健)第6学年</b>	
Well-Beingな健康生活をつくる学習	144
<b>ICT(国語科)第6学年</b>	
子供に「学ぶこと」「学び方」を委ねる学習	150

## 第3章 ICT実践事例 & 小金井小の一年

<b>「国語科」におけるICT活用術</b>	
話し合い活動を活性化！ ブレークアウトルーム	158
<b>「社会科」におけるICT活用術</b>	
まとめの表現活動をICTで	160
<b>「算数科」におけるICT活用術</b>	
「数学的な見方・考え方」をICTで共有！	162
<b>「理科」におけるICT活用術</b>	
モンシロチョウとTeams会議しよう！	164
<b>「音楽科」におけるICT活用術</b>	
聴く、つくる、共有するをもっと便利に！	166

「図画工作科」における ICT 活用術	
オンラインで広げよう 鑑賞術	168
「家庭科」における ICT 活用術	
ピフォーアフターが一目瞭然！	170
「体育科」における ICT 活用術	
タブレットでの振り返り活用術！！	172
「特別の教科 道徳」における ICT 活用術	
導入ではテキストマイニング!!!	174
「外国語科」における ICT 活用術	
ネット活用術でワンランクアップ！	176

## 小金井小の一年

入学式ーピカピカのなでしこ新1年生！ー	178
1年生を迎える会ーみんなは、なでしこの一員だよ！ー	179
一字荘生活ー八ヶ岳の大自然の中で仲間と成長！ー	180
なでしこ図書館ー豊かな学びの場ー	181
至楽荘生活ーなでしこパワー全開！ー	182
教育実習ー緊張と成長の日々ー	183
なでしこ運動会ー三色対抗！一致団結！ー	184
なでしこ展覧会ー体育館が美術館にー	185
音楽会ー音楽に思いをのせてー	186
卒業証書授与式ー成長した姿、感謝を伝えるー	187

「こえる学びの拡張」を視野に入れた学習環境デザインを追究して	188
おわりに	190
執筆者一覧	191

※本文中では、「Microsoft® Windows® 10」のことを「Windows 10」または「Windows」、「Microsoft Teams®」のことを「Teams」と記述しています。

## 第1章

# 「こえる学び」を目指して





## 予測困難な時代を生きぬく 子供たちへ

グローバル化が進展し、加速するテクノロジーの進化によってあらゆるものを取り巻く環境が複雑さを増してきた。現代、そしてこれからの時代は、変動し (Volatility)、不確実で (Uncertainty)、複雑で (Complexity)、曖昧な (Ambiguity) 時代、いわゆる VUCA 時代と呼ばれている。こういった先行きが不透明で予測困難な時代においては、答えのない課題に向き合い、適切な問いをたて、情報を収集・活用して問題を解決できる柔軟な力を兼ね備えており、経験したことがない状況においても、優れたパフォーマンスを発揮することができる人材が求められている。これまで比重の高かった断片的な知識や技能の習得だけでなく、人間の全体的な能力 (コンピテンシー) の育成に目を向ける動きとなったことは、至極当然のこととも言える。これは、教育の現場においても同様である。国立教育政策研究所では、社会の変化に対応する資質・能力 (コンピテンシー) として、21 世紀型能力を提案している。また、2020 年度より小学校で施行されている新学習指導要領においても、従来のコンテンツベースの教育から、コンピテンシーベースの教育への転換が図られ、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」「各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立」等が求められ、そこから、コンピテンシーが、知識や技能よりも一段階上位に位置付けられていることが読み取れる。

それと時を同じくして、あたかも足並みを揃えるかのように始まったコロナ禍は、教育現場を大いに混乱させた。まさに「予測困難」な状況にあり、教育というものの力、ひいては我々教師一人一人のスキルや能力を問われているようにさえ思えた。制約の多いこの状況において、我々教師がこれまで経験して得た技能や能力を引き出し、汎用することによって複雑なニーズに応じる能力である。しかし、視点を変えてみれば、コロナ渦によって生活スタイルの変更を余儀なくされたことは、慣例化した学校生活の意義を問い直し、新たな

学校教育を見直す良い機会となったとも言える。コロナ禍という予測困難な状況においても、新学習指導要領で示されている「社会に開かれた教育課程の実現」の理念のもと、子供の学びが学校でとどまることなく、実生活へと学びが継続し、実践したり広がったり深まったりしていくことが大切なのである。

本校では、2013年度より子供の学びを主体化させるための研究に重点を置き、「学習環境デザイン」を礎とした授業を展開してきた。子供たちには、教師がデザインした活動、空間、共同体（美馬・山内，2005）等の学習環境を主体的に結び付け、学びを進めていく中で、活発に思考を進めることが有用である。また、思考を重ねることが困難な子供や、学びを深められない子供に対しては、子供の様子や反応に応じて「教師の意図的な仕掛け」を講じながら、学習環境デザインを変容させていくことの大切さなのである。

2017年度からは、学校研究テーマを『「こえる学び」を生む学習環境デザインの追究』と設定し、学びゆく中で見られる子供の「没頭・実践・往還」の姿に着目しながら、主体的な学びをより具現化させてきた。この「こえる学び」の研究を継続しつつ、さらに、自分が知っていること以上の知識についての理解を深めようとしたり、他の知識と結び付けて新たな価値を見出したり、状況や環境を自ら働きかけたりする力を目指し、自分の生き方の範囲を広げるといった意味を込め、2020年度より、研究テーマを新たに「こえる学びの拡張」とした。Engeström（1987）は、拡張的学習活動は諸行為から新しい活動への拡張をコントロールすることの大切さを主張し、伝統的な科学は基本的に道具を生産する活動であるのに対し、拡張的学習活動は活動を生産する活動であることを述べている。これを本研究に当てはめて考えてみると、これまでの学習環境デザインの構築や学習指導の手立てによる成果を十分に発揮させ、子供が「こえる学び」として得た知識や技能、スキルを軸としながら、教科の枠を外した新しい活動を生産すべく、それらを汎用的に活用していく姿、そして、生きるための実働的な姿の実現を展望していくことにあると捉えている。

「こえる学び」から「こえる学びの拡張」へとつなげてきた本研究が、子供たちにとっての「予測困難な時代を生きぬく力」となりますように。

研究部長 濱田 信哉



# 「こえる学びの拡張」を視野に入れた 学習環境デザイン

## 1 本校研究の背景

本校の子供は学習に対して前向きな姿勢を感じます。低学年のうちから学ぼうとする学習意欲や、調べようとする探究心の高さが見られます。しかし、授業が終わった後、その学びは学校生活や日常の生活の中で役に立っているのでしょうか。学んだことをどのくらい発揮したり、行動に移してみたりできているのでしょうか。学校のきまりや習慣を守って生活することはできても、自ら学び得たことを生かし、新たな発想や取り組みを起こせる子はそう多くないように見えます。

『今ある自分の力を生活の場で存分に発揮できる子供になってほしい』

本校職員は子供たちにそのような願いをもつようになりました。まずは学校の授業で「こえる学び」を実現させる。そして、その授業後に子供が「こえる学びの拡張」を自ら起こしていく。これは、研究の視点を授業や単元だけにとどめるのではなく、学校生活や一般社会で生きる子供の姿にまで広げ、子供が自ら学び続けたり、自ら学びを実践したりすることができる新たな学習環境づくりについて考えることにしました。

## 2 「こえる学び」から「こえる学びの拡張」へ

### (1) 「こえる学び」とは

本校は2017年度より「こえる学びを生む学習環境デザインの追究」という視点で授業研究を行ってきました。この研究から、教師がデザインした活動、空間、共同体（美馬・山内、2005）等の学習環境を子供たちが主体的に結び付けて学んだり、思考したりしながら活発に思考を進めることの成果を得るとともに、授業を構成する際に“学習環境をデザインする”ことの重要性を得ました。

そして、「こえる学び」とは、子供が与えられた状況や環境に甘んじること



なく、自ら様々な学習環境に働きかけながら、自分の知識や技能を高めようとしていたり、もっとよい考えがないかを追究したりするような学びです。いわゆる、授業で先生の話を生懸命に聞いて理解する一方通行な学びや、あらかじめ用意された教材等で学習を進め、そこで満足してしまうような思考が広がりにくい学びではなく、授業で子供自らが学びをつくり、自らが探究し、それらの学びを自身で振り返ることができる姿です。

## (2) 「こえる学び」の姿と学習環境デザイン

授業で「こえる学び」を目指すことで、具体的な子供の姿として、

- ・自身が知っていること以上に知識理解を深める姿
- ・他の知識と結び付けて新たな価値を見出したりする姿 等

が挙げられます。このような、自分に限界を作らない子供を育てるために、教師は指導や発問の工夫、主体的に学ぶことができる子供のための学習環境をデザインしていかないとはいけません。本校教師は一人一人が各教科部に属し、日々教科研究を行っています。その専門性を生かし、教科に応じた多様な「こえる学び」を授業で示しました。

## (3) 「没頭」「実践」「往還」

授業で「こえる学び」を生むには子供が「没頭」したり「実践」したり「往還」したりすることができるような具体的な子供の姿を描き、それらが発揮できるための学習環境の場を提供することが大事と考えました。「こえる学び」が生まれるための主な学習環境デザインは以下の3点です。

### 没頭

没頭することは、意識してできることではなく、様々な条件や環境が作用してできる状態（鹿毛、2013）であり、集中、熱中、夢中という姿を含んでいる。子供が課題や対象に向かうことで、知的、情意的、身体的な面で自分の知らぬ間に内在する力を発揮できるような学習環境デザインをつくりま

## 実践

実践するとは、学んだことを試行していくことです。子供が自分の学びを自覚することにもつながります。授業を行うにあたって子供は未習や未知のこと、多様な方法や考え方があることに会います。それらの課題について、これまでの知識や技能、経験等を駆使して解決していくような学習環境デザインをつくります。

## 往還

往還するとは、学びを振り返ることです。自分の学びを創造したり更新したりするためには、直線的に課題や問題に進むだけではなく、自分のこれまでの知識と課題や対象の間を行ったり来たりして考える必要があります。このような過程を通して、課題や対象が自分事となっていくことを期待します。自分は何を解決しようとしているのか、何ができるようになったのかを振り返りながら自分の学びの成長を実感し、次時の「学びたい」「学んでよかった」という主体的な意欲を生むような学習環境デザインをつくります。

### (4) 「こえる学び」から「こえる学びの拡張」へ

子供のこえた姿が授業および単元終了後に実の場でも発揮され、「没頭」「実践」「往還」が継続される場面として、他教科での授業場面、学校での生活や行事場面、家庭での生活場面、社会における自分との関わりの場面等が挙げられます。子供が主体的に学び続け、他者と関わり合いながら学んだ知識や技能を深めることができるようにすることが、これからの未来で必要な力になるでしょう。こういった、授業での「こえる学び」で得られた教科の本質が十分に生きる、広い視野での新たな学習環境デザインを柱にしていく必要があると考え、「こえる学び」の後に生きる「こえる学びの拡張」という新たな研究テーマを掲げました。

### 3 「こえる学びの拡張」

#### (1) 「こえる学びの拡張」とは

「こえる学びの拡張」は以下のような子供の姿です。

学習を終えた子供が自発的に学び続けたり、  
学んだことを発揮したり実践してみたりする姿

これは、自分が知っていること以上の知識についての理解を深めたり、他の知識と結び付けて新たな価値を見出したり、状況や環境を自ら働きかけたりする力を目指し、自分の生き方の範囲を広げるといった意味が込められています。Engeström (1987) は、拡張的学習活動は諸行為から新しい活動への拡張をコントロールすることの大切さを主張し、伝統的な科学は基本的に道具を生産する活動であるのに対し、拡張的学習活動は活動を生産する活動であることを述べています。授業で教師が設定した学習環境デザインや指導の手立てによる成果を十分に発揮させながら、子供がこえた姿を基に教科の枠を外した新しい活動を生産し、生きるための実働的な姿の実現を願ったものです。

授業後に「こえる学びの拡張」として学んだことが発揮される場面は学校生活をはじめ日常生活や自身に関わる社会です。また、今後の授業等の学習など広い捉えをしています。

「こえる学びの拡張」が発揮される場

学校生活：本校の教育目標である「明るく思いやりのある子、強くたくましい子、深く考える子」を実現し、楽しい学校生活を送ることができる。

(休み時間、特活、委員会、他単元での学習 など)

日常生活：家庭での生活、また生涯における自身の諸課題に対して、自己調整しながら自分自身を高めていくことができる。

(登下校、日常生活、子供自身に関わるコミュニティ など)

社会生活：リスク社会や労働、災害等を自分事として見直し、自身の生き

方についてどのように受け止め、向き合っていくか考える。  
(子供の将来、生き方 など)

## (2) 「こえる学びの拡張」で求められる汎用的スキル

“学んだことが発揮される”とは、学習した教科内容や知識が役に立つ活用的な捉えではなく、子供が授業で身に付けたスキル（力）をどのように発揮させていくか、行動に移していくかです。そこで、OECDが提言するキー・コンピテンシー（資質・能力）を基に、人間育成の観点に沿った本校の子供たちに求められる必要な汎用的スキルについて整理しました。その結果、「学習に直接関わる認知学習スキル」と「生活や人生に関わる非認知能力」の2つに整理することができ、14項目のスキルを設定しました。

### 学習に関わる認知学習スキル（7項目）

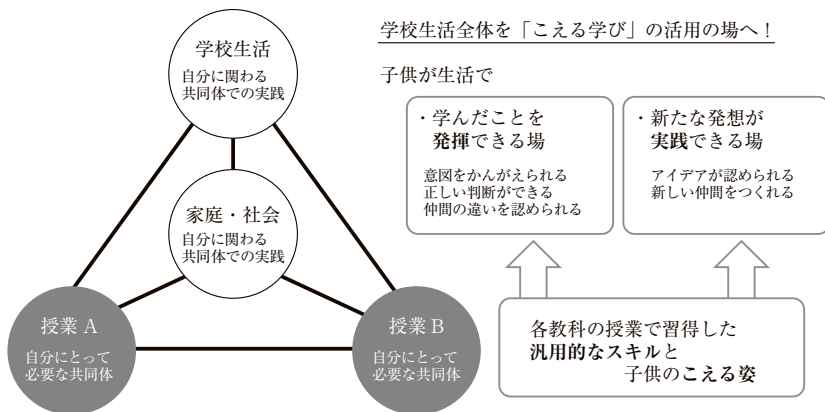
- ①批判的思考力
- ②問題解決
- ③協働
- ④コミュニケーション能力
- ⑤先を見通す力
- ⑥情報収集能力
- ⑦他者への受容

### 生活や人生に関わる非認知能力（7項目）

- ⑧メタ認知スキル
- ⑨創造性・感性
- ⑩意欲・探究心
- ⑪忍耐力・回復力
- ⑫自己認識
- ⑬社会適性
- ⑭自制心

## (3) 「こえる学びの拡張」を視野に入れた新たな学習環境デザイン

「こえる学びの拡張」は、主に授業後に先で述べたスキルが発揮されることです。なので、私たち教師はそれを学校の授業や単元を通して醸成し、学校生活全般で発揮される様子を支援していかないとはいけません。よって、「こえる学びの拡張」を実現させるためには、学校の授業で「こえる学び」をより具体化、明確化していくとともに、学習環境デザインを「こえる学びの拡張」まで視野を広げたものに改編しました。まずは、「こえる学び」を活性化・見える化するために、授業で仲間と関わりながら思考を広げたり自身の学びを見つめ直すことができたりする新たな場面を学習環境デザインに取り入れました。



### ①他者と関わる場づくり

子供たちが学びに対してどのような力や意識を有しているかを調査した結果、創造性・感性、協働する力、他者への受容が高かったことから、本校の子供たちは「感性が豊かで、仲間を受け入れ、協働する子」である可能性が見えてきました。これは、人との関わりを大切にできる力があるものと判断できます。そこで、他者と関わる活動に着目した学習環境をデザインすることで、「こえる学び」の活性が起きるのではないかと考えました。

他者との関わりに着目した「こえる学び」と「こえる学びの拡張」までを視野に入れた新たな学習環境デザイン

- ・ 他者との関わりを通して、学びの振り返りや、見通しが持てる意識化
- ・ 自分の「こえるべき学習」を他者と伝え合いながら、互いの「立ち向かう壁」や「こえた姿」を認め合える関係性の形成
- ・ 他者と関わり合った学び合いを通して相手の考えに意味づけをしたり価値付けたりすることができる自由な場づくり。また、教師の見取りの支援

このように、仲間に言葉で伝え合ったり、態度で表したり、他者を意識したり求めたりしながら学ぶことができる学習環境を新たにデザインすることで、これまで子供一人で成し遂げようとしていた「こえる学び」の学習過程をより

表出できることが期待できます。

## ②他者との関わりから生まれる「こえる学びの拡張」

他者との様々な関わり合いを行うことは、子供自身の思考をより活発にするだけでなく、子供の自尊感情を高めます。これは「こえる学びの拡張」につながっていくものと考えました。

他者と関わることで高まる「こえる学び」

- ・“話し合う”ことで自身の課題に対してより「没頭」できる。
- ・“友達と共に行う”ことでより自信をもった「実践」ができる。
- ・“友達の考えを受け入れる”ことで学びを「往還」し、新たな考えがもてる。

その他にも「こえる学び」に直結する関わりとして、“友達の悩みを察する”ことで手を差し伸べたり、“友達の力を借りる”ことで、自分の課題解決に役立ったり、“友達と共に”解決したり、“友達の成功を受け入れ”ながら自身の行為を振り返ったり“友達の立場になって”表現したりすることが挙げられます。

## 4 「こえる学びの拡張」につながる具体的な実践研究 (研究の方法)

### ①教科を基盤とした授業研究

「こえる学び」は、各教科の特性を生かした授業を基盤にし、教科ならではのスキルを発揮させながらテーマの実現を目指していきます。そのため、研究組織として教科部を編成し、教科部ごとの「こえる学び」を目指した教科部テーマを提示して、実践に取り組みました。各教科の授業で起きる子供一人一人の「こえる学び」を仲間と共に探究できるような手立てを講じ、教科ならではのスキルの特性と、子供の伸びゆく姿について議論しました。

### ②「こえる学び」「こえる学びの拡張」を視野に入れた授業計画

授業実践では「こえる学び」として「没頭」「実践」「往還」の姿が発揮され

る視点を設けて単元の指導計画および授業立案を行いました。「こえる学びの拡張」は主に授業後に見られる子供が学び続けたり、行動に移したりする態度なので、授業内での見取りは困難です。しかし、授業で子供が拡張しようとする意欲や、学び続けたいくなる気持ちの持続を教師が仕掛けることは可能です。そこで、「こえる学びの拡張」は子供が学習後にどのように学び続けるか、行動に移すかなどを教師が描きながら指導計画を作成することにしました。

### ③「こえる学びの拡張」の見取り

「こえる学びの拡張」は、授業で学んだことが後に発揮される子供自身の行為になります。一教科の一授業で見られる拡張もあれば、いくつかの授業で長期的に獲得したスキルもあるでしょう。こういった子供の姿は学校全体で複数の教師の目で見取っていく必要があります。しかし、見取りには限界があり、はっきりと見取れないものがほとんどです。見取りの研究は今後の課題として検討していかなくてはなりません。本研究では授業者を中心に、授業後の学習感想や授業中の行動を見取りました。

後頁の各教科部による実践事例は、「こえる学び」の研究成果、「こえる学びの拡張」につながる教師の手立てをまとめております。

研究推進 三井 寿哉

### 参考文献

- Engeström, Y (1978) 『Learning by expanding: An activity-theoretical approach to developmental research. Helsinki: Orienta-Konsultit.』 [エンゲストローム／山住勝広ほか訳 (1999). 「拡張による学習：拡張理論からのアプローチ」新曜社]
- Engeström, Y., Engeström, R., & Kärkkäinen, M. (1995) 『Polycontextuality and boundary crossing in expert cognition: Learning and problem solving in complex work activities』
- 鹿毛雅治 (2013) 『学習意欲の理論－動機付けの教育心理学』金子書房
- 美馬のゆり・山内祐平 (2005) 『『未来の学び』をデザインする－空間・活動・共同体』東京大学出版会





## 第2章 実践編



# ことばの感度を高め、批判的 思考を身に付けていく授業

大村 幸子

学びとは、教師が一方向的に与えるものではなく、授業の中で、教師と学習者（子供）がつくり上げていくものであると考えています。子供は、既にもっている知識をもとに、他者（教材、筆者、友達）と対話しながら、自ら、実生活に生きて働く知識を再構築しながら、学びを深めていくのです。

本授業では、教材文「どうぶつの赤ちゃん」を取り上げ、他者と対話しながら「くらべてびっくり!」を読むこととしました。この活動を通して、ことばに立ち止まり批判的思考を働かせて文章と向き合う姿が見られることを期待しました。



## 1 「こえる学び」と「こえる学びの拡張」

国語科における「こえる学び」とは、

- ① 既存の知識や経験と結び付けて、筆者のことばや論理を理解しようと没頭する姿
- ② 理解したことや他者との学びを生かして、筆者の論理や文章の価値を多面的に見ようとしたり、本質に迫ろうとしたりして実践する姿
- ③ 筆者の論理から学んだことを自覚し、自分の認識を広げて読んだり考えたりしながら、自分を更新していく姿

と捉えています。小学校1年生は、教材文の内容そのものにも興味をもって読む姿が多く見られますが、小学校1年生であっても、筆者を意識させることで、

筆者のことばや見方・考え方に驚きや感動をもって読み進めることができるのではないかと考えています。本実践においても、ことばに込めた筆者の思いや、事例を対比的に説明する筆者の意図に気づき、「くらべてびっくり！」を読もうとしていました。①や②の姿であると言えるでしょう。

また、そうした読みを普段の読書活動に生かそうとする姿が見られました。増井氏が書いた「どうぶつの赤ちゃんシリーズ」を読み、対比的に感想を述べたり、読み取ったことをもとに「どうぶつの赤ちゃん」のオリジナル説明文を書いたりする姿です。③の姿と言えるでしょう。

こうした姿は、授業後に、「こえる学びの拡張」として、様々な場面で見られるようになります。例えば、他の説明文を読む際に、今回学んだ読み方を生かして読んだり表現しようとしたりする姿や、納得しながら文章を読み進めようとする姿などです。その都度、声をかけ、子供たちの学びを価値付けるようにしています。

## 2 「こえる学びの拡張」を視野に入れた学習環境デザイン

### (1) テクストを教材化する

小学校1年生は、教材文「どうぶつの赤ちゃん」の内容そのものに興味もち、新しいことを知る喜びを原動力に読み進めていきます。ですから、文章の構造や筆者の論理に自ら気付いていくことは難しいと思われます。

そこで、教材文と出合わせるときには、まずは、「初めて知った」「面白い」というわくわく感を存分に表現させることを大切にしています。その感動を記述させ、発表させることで、子供のことばが詰まった教材になります。子供のことばをつないでいくと、子供の思いに合わせた学習課題を立ち上げることができます。

- C1：ライオンの赤ちゃんは小さくて、お母さんがお世話をしているけれど、  
しまうまの赤ちゃんは、自分で立って歩けてすごい。ほくたちは、どう  
だったのかな。
- C2：しまうまの赤ちゃんは、なんで、最初から立って歩けるのかな。他の動物に襲われないようにするからかな。鹿はどうなのかな。
- C3：私は、猫が好きです。猫の赤ちゃんのことも知りたいです。

本実践では、これらの感想を1枚のシートにまとめて、読み聞かせをしながら、紹介しました。その後のやりとりを通して、「好きな動物について、生まれたばかりの様子や大きくなっていく様子を調べて、「くらべてびっくり図鑑にまとめよう」という学習課題が立ち上がっていきました。

また、本実践では、教師が作成した文章(右図)を提示し、本文と比べて読む時間を設定しました。子供たちは、本文との違いにすぐに気付き、文章の構成や表現につ

いて、自分の考えを發表していました。最初は、文章の構造や筆者の論理を読むことは難しいと予想していましたが、授業を通して、子供自らがそうした読みを獲得し、自信をつけていったことがよく分かります。本文を書き換える形で、教師が文章を提示することは有効であると考えています。

パンダの赤ちゃん　こくこ　さんた  
パンダの赤ちゃんは、生まれたときは、とても  
小さく、人の手のひらに　のるくらい大きさで  
す。目や耳は、とじたままです。けがほとんどは  
えていなくて、ピンクいろのはだが見えています。  
おかあさんにはあまりにいていません。  
パンダのゆびは、六本あるといわれています。  
おやゆびのよこに出っぱりがあつて、このゆびと  
手で竹を上手に　つかむことが　できます。  
パンダのうんち　は、ぜんぜんくさくありません。  
竹ばかりたべているので、すこし竹のにおい　が  
します。竹は　かたいので、しょうかさげず、ほ  
とんど　そのまま出てくるためです。

教師が作成した教材文

## (2) 対話をデザインする

他者(教材、筆者、学習者)との対話を成立させるために、本実践では、「くらべてびっくり」をキーワードとすることとしました。文章に書かれていることについて「くらべてびっくり」をキーワードに対話をしながら読んでいくことで、一人の読みでは気付かなかった読みの深まりを実感できるのではないかと考えました。対話を促進するために、次の2つの手立てを講じました。

1つ目は、教材との対話において、ことばと既存の知識や経験と結び付け、イメージをもって、書かれていることを理解していくために、動画の視聴や具体物の提示、動作化や挿絵の活用などを行いました。例えば、しまうまの赤ちゃんの大きさを机や椅子などを用いて実際の大きさを確認したり、カンガルーのお母さんの袋をエプロンで表して、お母さん



写真1 教師による実演

の袋にはい上がる赤ちゃんの力強さを  
実演したりしました。

2つ目は、学習者同士の対話において、それぞれの思考を可視化して、共有しやすくするために、ワークシートを活用しました。ワークシートには、本文における大事なことばや文を付箋に記して貼り、自分の考えを書き込むこととしました。自分の考えとしては、ことばの言い換えや補足、感想や

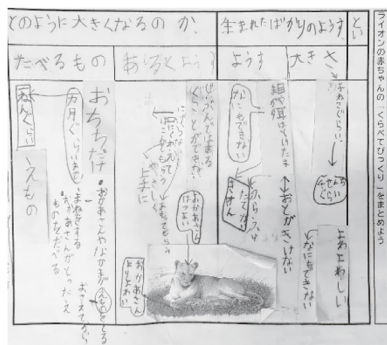


写真2 子供のワークシート例

考えなどを書いたり、→や□でつないだりしながら、情報を整理したりする姿が見られました。ワークシートの書き方については、ライオンの事例の読み取りから、子供たちと共に考えて決めていきました。

### 3 実践


#### (1) ことばに立ち止まり、その意味を考え始めた場面

本時では、カンガルーの赤ちゃんの事例を読み、「くらべてびっくり」をまとめるという学習を行いました。それぞれがワークシートにまとめた後、全体的話し合いの中で、次のようなやりとりがありました。

- T：こんな小さな赤ちゃんなのに、どんなことをするって書いてあったの？
- C1：それでも小さな赤ちゃんは、お母さんのおなかにはい上がっていく。
- C2：はい上がっていくって、どういう状態ではい上がっていくのかな。
- C3：こうやって上がっていくんだよ。(手と足で進む様子を動作化)
- C4：足も手も全然ないのに、どうやって上がっていくんだろう。足もちょっとなしかなのに、どうやって…。
- C5：もしかしたら、おかあさんがすわってくれたりするのかな。

「はい上がる」ということばへの着目から、イメージと結び付けて、読みを深めている様子が見られました。その後、前述のように、教師がエプロンを着けて、カンガルーのお母さんの袋を再現し、「はい上がる」という行為を実演してみることにしました。子供たちは、カンガルーの赤ちゃんになったつもり

で、夢中になって考えていました。その中で、本文に立ち戻り、カンガルーの赤ちゃんの大きさやお母さんとの関わりを読んだり、他の動物の赤ちゃんと比較して読んだりする子供が出てきて、話し合いが続いていきました。



### こえる学びの姿

「はい上がる」ということばへの着目を通して、カンガルーの赤ちゃんの生きる強さや自然界の厳しさに気付いていくという展開が見られました。書いてある内容をイメージと結び付けながら丁寧に読むことで、驚きや感動が生まれ、そして、それが筆者の論理を読むことにつながっていくという学びの姿に、私自身も多くのことを学んだ場面でした。

## (2) 筆者の論理に違和感をもち始めた場面

カンガルーの事例を読んだ後に、今度は自分の好きな動物についてまとめることを意識させた上で、教師が作成した文章（段落同士が比較の関係にない文章）を提示しました。この文章を読んだ直後は、「ゆびが6ほんあるの」「うんちだって」と書いてあることばに着目した発言が多くありましたが、その後、「えー、おかしいよ」「ちがうことが書いてある」という声が多く挙がり、下のやりとりにつながりました。

- C1：ほくたちが知りたいのは、特徴や歩く様子や食べる様子だから、うんちは関係ない。
- C2：赤ちゃんのことを比べていたのに、ちがう話は参考にならない。
- C3：パンダのうんちは全然臭くないとかは、耳とか、歩く様子とか、食べる様子には関係ない。
- C4：増井さんは赤ちゃんのことを書いていたから、まねしたい。
- C5：こくごサンタさんが書いた文章は、うんちは書いてあるけど、ほくたちの書いているこの表紙（目次）にも、うんちって入れれば、なんかあてはまりそう。
- C6：赤ちゃんのうんちと大人のうんちを比べてもいいかと思う。

## こえる学びの姿

赤ちゃんのことを知りたいのに、指のことやうんちのことは関係ないという発言のように、文章を読んで、あれ、何かおかしい、関係ないことが書いてありそうだという感想を多くの学習者がもっているようでした。こうした文章に対する懐疑的な態度は、批判的思考のもととなる批判的思考態度と捉えることができます。また、文章の構成について着目した、食べるという説明のまとまりの中に、うんちを入れたらいいという発言や、赤ちゃんのうんちと大人のうんちを比べたらいいという発言は、まさに批判的思考を働かせているとも言えます。こうした姿から、筆者の論理に気付くような仕掛けを講じることで、批判的思考を働かせた読みが促進されるということが分かります。

## 4 「こえる学びの拡張」につながる子供の姿

カンガルーの赤ちゃんの事例を読んだ後、「感想をまとめたい」という声が多数上がったので、書くことにしました。以下、子供たちが書いた感想です。

- C1：人とちがうところとおなじところがあって、おもしろい。カンガルーの赤ちゃんが一円玉くらいなんて、いがいでびっくりしました。
- C2：カンガルーの赤ちゃんは、じぶんではいあがったり、じぶんでふくろから出たりして、せいちょうスピードがしまうまとおなじくらい早い。
- C3：あかちゃん、ちからがすごい。だって、ふくろにじぶんで入るから。すごいから。10か月ででる。ほんとすごいとおもいます。

それぞれが、興味をもったことばや違和感のあることばに立ち止まり、一生懸命に、自分の考えを表現しようとしていました。学んだことを生かして、「くらべてびっくり」という視点で読む姿から、ことばへの感度を高め、批判的思考を働かせながら読んでいることが分かります。教師が与えた学習ではなく、自らやりたいという活動の中で、学びを生かそうとする姿は、「こえる学びの拡張」につながる大事な一歩と言えるでしょう。